

2020年4月26日
復活節第3主日

家庭礼拝のための
聖書・牧会祈禱・メッセージ



【聖書】ローマの信徒への手紙 13章 11節～14節

13

¹¹ 更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に來ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。¹² 夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。¹³ 日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、¹⁴ 主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

【牧会祈禱】

命の源である神様。

今週も私たちが暮らすこの家を、御言葉が語られる教会としてくださり、ありがとうございます。イエス様がこの家の頭です。どうか私たちを見守っててください。それぞれの場所で共に礼拝をささげている兄弟姉妹を祝福してください。

新型コロナウイルスに感染した人が差別を受けています。癒やされなければならない人が、心まで追い込まれています。また医療や、教育、私たちの生活を維持するために働く人にまで差別や批判が及んでいます。私たちの罪が、このような哀しい社会を作っています。どんなに努力しても、自分の力では罪に勝つことができません。神様がこのような私たちでさえ深く愛してくださる、その憐れみによってのみ罪から離れることができるのです。神様どうか、私たちを赦し、罪による人生ではなく、愛による人生を歩ませてください。

入院中の兄弟、術後の療養をしている兄弟姉妹に神様のお支えがありますように。この状況の中で落ち込んでいる友たちの気持ちを晴らしてください。今、あなたから与えられた使命として働きに出ている友たちは、不安や緊張を抱えています。どうか今週も守られますように、心から願います。今週、私たちの口が優しい言葉と、あなたへの賛美を紡げますように。わたしたちの手足が、愛の働きをなすことができますように。どうか用いてください。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。

アーメン。

人には様々な生き方があります。パウロが生きていた時代のユダヤ人にとって律法を守ることが最も良い生き方でした。しかし、パウロは律法を守ることは、大切なことの外側にしかすぎず、その中身は隣人を愛することなのだと言いました。

今日のテーマは、どうして今そのような生き方が求められているのかということです。11節には「眠りから覚めるべき時が既に来ています」とあります。この手紙が書かれた約7年後に皇帝ネロによるキリスト教の迫害が起きていますから、差し迫る危機をパウロは感じていたのかもしれませんが、ここはそのような「歴史的な時」ではなく、私たちの「信仰的な時」のことを語っているように思います。「信仰に入ったころよりも、救いは近づいている」とあります。私たちが洗礼を受けてから、しばらくの時が経過し、イエス様の再臨が近づいたというだけではありません。洗礼を受けたときの高揚感や、誠実に歩むのだという決意はだんだんと生活の中に溶け込んでいきます。最初のフレッシュさが無くなることは悪いことではありません。人間の気負いを捨て、神様の思いもよらない恵みに降参するという経験もします。救いが近づいたとは、救いの重みが私たちの中でいっそう増したということでもあるのです。だからこそ、夜には寝間着、昼には洋服と時間や周囲に合わせて使い分けるような生活ではなく、キリストを着る生活をしなさい、とパウロは勧めます。

私たちは14節にあるように「欲望を満足させようとして、肉に心を用いる」ことがあります。他者を自分のものとして扱おうとする欲、それは

争いやねたみを生みます。自分を自分のものとして扱おうとする欲、それは泥酔や放蕩を生みます。本当の所有者である神様を忘れると、私たちはずいぶん身勝手になるのです。

キリストを着るということは、努力してキリストのようになるということではなく、神様に繋がるひとりの人としてしっかり立つということです。

12節には「夜は更け、日は近づいた」とあります。これは、真夜中を過ぎたということですので、まだ光など感じられないような時刻です。しかし、パウロは「だから、闇の行いを脱ぎ捨て、光の武具を身に着けましょう」というように「だから」と文章を続けています。

新型コロナウイルスによって世界中が混乱している今、この聖書箇所は胸に迫るものがあります。いつの時代も生きていくことは決して楽なことではありません。神様は人がこの命を生きられるようにしてくださいました。神様が選ばれた方法は、私たちのところまで降りてきて、一緒に苦しむということでした。どんな私たちであっても愛し続け、死にさえ終わらせることができない命があると示されることでした。今、まさに神様が私たちと共に苦しんでおられます。罪に引きずられる私たちを愛し続けておられます。だからこそ、真夜中を少し過ぎた時刻にも朝日が昇ることを信じられるのです。

こんな時代になるなんていう嘆きもあります。しかし、こんな時代だからこそ、神様が私たちを立てておられるのです。必ず来る夜明けを告げる者として。